

京極読書新聞 <第51号>

発行日 平成25年 11月 1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

羊蹄山麓を一巡り・バスの旅

<後志文学散歩 2013>

5年目を迎えた湧学館の「後志の文学講座」。今年の「バスの旅」は、金曜夜の読書会が発掘してきた数々の名作の舞台をたどる総集編的な文学散歩となりました。10月12日(土)午前9時、19名で出発。優れた運転のおかげで、全行程を予定の時間内でまわることができました。湧学館に戻ってきてからひらかれた「小樽・余市グッズ抽選会」も好評。雨模様の天候の中を走ったにしては、上出来の「後志文学散歩」となりました。(新谷保人)



▲ ニセコ／有島謝恩会館前にて（梅田滋氏撮影）



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

1. 京極／北の沢

まずは、京極町字錦へ。京極町出身の作家峯崎ひさみさんの小説『穴はずれ』で「北の沢」と呼ばれた地域です。峯崎さんの家があったところまで、できるだけ近づいて（現在、最後の山道部分が崩落しています）、そこから錦小中学校跡をめざしてバスをゆっくりと走らせてもらいました。小説の中で「子どもの脚で一時間ほど」と描かれている通学路。峯崎さんが九年間を通った道に、豊乃や朝子たちの人影を追いました。

2. 喜茂別／さみしい橋

<北の沢>を抜けて<さみしい橋>へ。行方洋子さんの小説『さみしい橋』は12月の「山麓文学館」読書会（今年度最終回）でとりあげますが、雪が降り積もる前に、そのモデルとなった喜茂別の「しりべつばし」を目にしておこうと出かけました。この日は、強い雨風をもたらす黒雲の切れ間の向こうに、秋の澄みわたった青空がのぞいているという不思議な天気の日でした。小説の中に登場する<隅田>地区の様子が、妙にその日の天候に合っていて独特の雰囲気。なるほど、この光景、山麓のどこの町にもありそうで、じつは喜茂別にしかない光景かもしれません。

3. 留寿都／登延頃

鈴川の山並みを回り込んで<登延頃（のぼりえんころ）>へ。大沼桂子さん『多与』の世界です。現在、尻別川に注ぐ支流「登延頃川」にわずかにその名を残す<登延頃>ですが、百年前、多与たちが開拓に入った笹原と原始林の大地に想いをはせました。

<北の沢>～<隅田>～<登延頃>と、ことごとく後志文学散歩の定番を無視して始まった今年の「バスの旅」。次の訪問地に「有島武郎」の名が出てきて、やっと一安心といったところでしょうか。でも、湧学館ですからね。油断はできません。

4. ニセコ／有島謝恩会館

案の定、着いた場所は「有島謝恩会館」。「有島記念館」ではありません。その横の建物です。ここに有島武郎の絵が無造作にかけられているという情報を得まして、「ぜひ

見たい!」となりました。私たちは有島の絵を大切なものと考えています。なぜなら、『生れ出づる悩み』という小説は、木田金次郎の絵がすばらしかったから書かれた小説ではないのです。逆です。黒百合会展で出会った有島の絵が凄かったからこそ、それを目にした木田が、いてもたってもたまらず札幌豊平の有島の家を訪ねていったところから物語は動き出すのです。



本当に、無造作にかけられていました。その中の一枚が、昔、日本近代文学館で売っていたおみやげ絵葉書の一枚と同じ絵だったので、これは、若き日の有島が留学先から知人たちに宛てた手製絵葉書の絵だということはすぐにわかります。でも、まさか、裏側に有島直筆の書簡文が入っているような貴重資料がここに置かれているわけもなく、いったいこれは何なんだろうと帰りのバスの中でも話題になりました。



後日、この絵は、有島生馬編『有島武郎滞欧画帖』（日本近代文学館、1963.9）からのものであることが判明しました。今年度の製本教室での題材にいいかもしれませんね。

5. ニセコ／王子発電所

トンネルをすぎると、姉妹は急いで窓をあけた。もうすぐ右手に、山の中の発電所の家がみえるのだ。

レールの下の切りたつた崖も、その下方を青々と流れる川も、川の向うの緑の山々も、二人においておいでをしているようだ。やがて、小山の裾が切れると、段々ならびの社宅の屋根が、次には三本の黒い鉄管とその下の赤煉瓦の発電所があらわれた。

「父さあーん」

「母さあーん」

(畔柳二美『姉妹』／「帰郷」)

『姉妹』の名シーン、尻別川の流れを挟んで、汽車の窓と発電所社宅の人たちで交わされる帰郷の光景。このちょっと不思議な位置関係がどのようになっているのか、確かめるために発電所へ行ったのですが、肝心の発電所が現在改修中。全面にシートが被せられていて、少し興ざめでした。

6. 岩内／木田金次郎美術館

昼食を昆布温泉「ニセコグランドホテル」でとった後、岩内の木田金次郎美術館へ。

現在、「第一回個展の頃」展がひらかれていて、木田金次郎60歳にして初めてひらいた個展の出品作を一階フロアに集めています。通常は一階にある木田のレギュラー作品は、今、二階の方へ。つまり、美術館全部が木田の名作で満艦飾に埋めつくされている状態で、いや、凄い迫力ではありました。

今回のバスの旅は、ある意味、羊蹄山のさまざまな姿を楽しむ旅でもあったのですが、ここ木田金次郎美術館でも力強く美しい「羊蹄山」に出会うことができました。

7. 岩内／ケンブリッジ

市川森一さんのテレビドラマ『ここではない何処か』の舞台となった「ケンブリッジ」でお茶休憩。ヒロイン・石田ゆり子さんからの礼状の隣には、後志ゆかりの画家・西村計雄氏の美術館のポスターも。お洒落な調度や綺麗な美術品に皆ため息です。



8. 倶知安／六郷公園～孝運寺

旧国鉄胆振線の六郷駅の跡が、現在は「六郷鉄道記念公園」となって残っています。そこから、国道393を跨いで、斜めに孝運寺方向へ続く小径が胆振線の線路跡なのです。この日は雨で草が濡れていて、歩いてみるのは中止しました。

孝運寺の第三代にあたる大森光章氏。今は無き「脇方」の街が舞台となった『星の岬』。伝説の作家「沼田流人」も登場する『このはずくの旅路』。京極の町とも深くかわる作品群を私たちに残してくれた大森光章氏の発見は、今年の読書会最大のホームランといっているでしょう。

9. 倶知安／旧八幡神社

その、沼田流人『血の呻き』。今年も「バスの旅」用に『山麓文集』という小冊子をつくりましたが、その中で、今までにやったことのない試みをいくつか行っています。そのひとつが、『血の呻き』の現代語訳。超難解と遠ざけられてきた『血の呻き』を今の人にも読みやすい形に改めました。また、倶知安神社(旧八幡神社)さんのおかげで、初めて目にすることができた沼田流人の「書」も速報しました。新しい流人像の誕生です。



10. 京極・湧学館／小樽・余市グッズ抽選会

「一日バスの旅」の時間では後志全部をまわりきるといのはなかなか難しい。例年、小樽・余市と岩内・ニセコの地域を交代でまわるようなコースをとってきました。しかし、今年は過去五年間の総集編。そんなこと

もあって、<グッズ抽選会>という方法で、小樽・余市からの参戦も計画した次第です。なにかいい物が入ってましたでしょうか。景品には、さりげなく、峯崎さんの『穴はずれ』も2冊ほど入っていましたよ。



▲ 木田金次郎美術館にて

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

